

## ゲルマン語\*būan をめぐる音韻・形態論上の諸問題

下寄 正利

\*būan は、すべてのゲルマン語に共通して存在していた動詞である。

ゴ bauan、古ア búa、古英 būan、古ザ būan、古フ būwa、古高ド būan  
(ゴ=ゴート語、古ア=古アイスランド語、古英=古英語、古ザ=古ザクセン語、古フ=古フリジア語、古高ド=古高ドイツ語)

現代語においても、英語からはその姿を消してしまっているものの、他の言語では今なお用いられている。

ア búa、フェ búgva、ノ bo, bu、ス bo、デ bo、オ bouwen、西フ bouwe、低ド boen, buen, bugen、ド bauen  
(ア=アイスランド語、フェ=フェーロー語、ノ=ノルウェー語、ス=スウェーデン語、デ=デンマーク語、オ=オランダ語、西フ=西フリジア語、低ド=低地ドイツ語、ド=ドイツ語)

本稿では、この\*būan を巡るいくつかの音韻・形態論上の問題を取り上げ論じてみたい。

\*būan は、*wachsen, entstehen, werden*“といった意味を持つインド・ヨーロッパ祖語の語根\*bhūeh<sub>2</sub>から形成されている。この\*bhūeh<sub>2</sub>という語根は、インド・ヨーロッパ語族内に非常に広く分布しており、例えば次にあげる動詞形態は、すべてこの語根から形成されている。

ヴェーダ語 bhávati (wird, ist)、アヴェスタ語 bauuaiti (wird)、ギリシア語 φύω (zeuge), φύομαι (werde)、アルバニア語 bīnj (keime, sprosse)、ラテン語 fui (war), fīō (werde, entstehe)、古アイルランド語 boí (war)、中期ウェールズ語 bu (war)、古リトアニア語 bit(i) (er war)、古教会スラブ語 bystъ (war, wurde)

ゲルマン語でも\*būan の他、西ゲルマン語の *verbum substantivum* の直説法現在形において b-で始まる形態が\*bhūeh<sub>2</sub>から形成されている<sup>1</sup>。

<sup>1</sup> ただし、b-で始まる形態の多くは、\*bhūeh<sub>2</sub>と\*h<sub>1</sub>es-の混交である。Krahe (1969) S.140f.

ゲルマン語の強変化動詞の *verba pura* は、本来現在形が-j-現在形であったとされる<sup>2</sup>。ただし \*būan については、-j-現在形であったかどうかという点につき研究者の見解が分かれている<sup>3</sup>。しかしながら、現在語幹形成要素-j-がかつては存在したと仮定するにせよ、この-j-はすべてのゲルマン語で何の痕跡も残さず消滅しており、従ってより古い形が \*būjanan であろうが \*būanan であろうが、どの言語の形態も \*būan という中間段階の形態を経て形成されていることに変わりは無く<sup>4</sup>、本稿でもこの形を祖形として用いている。

\*būan の各言語における形を見てみると、古アイスランド語、古英語、古ザクセン語、古フリジア語、古高ドイツ語では幹母音が ū なのに対し、ゴート語では áu [ɔ:] である。これは、ゴート語において、ū が母音の直前にあると舌の位置が下がり áu になるという変化が起こったためである<sup>5</sup>。この変化は、bauan の他、次の2つの *verba pura* において見ることができる。

ゴ bauan — 古ア gnúa、古高ド nūan

ゴ trauan — 古ア trúa、古英 trūwian、古ザ trūōn、古高ド trūēn

本稿では、ゲルマン語の諸形態の祖形を \*būan としているが、これには異論もあり、すべてのゲルマン語の形態が \*bōwwan という祖形から形成されているという説<sup>6</sup>や、ゴート語 bauan は \*bōūan から、幹母音が ū の古アイスランド語 búa、古英語 būan、古ザクセン語 būan、古フリジア語 būwa、古高ドイツ語 būan は \*būan から来ており、両者の間にはアプラウトが見られるという説<sup>7</sup>や、ゲルマン語の諸形を説明する際アプラウトは仮定するが、ū : öü ではなく ū : ō というアプラウトを仮定し、この ū, ō の後に渡り音として w が発生したとする説<sup>8</sup>がある。

\*bōwwan や \*bōūan や \*bōwan という祖形が仮定される最大の要因は、ゴート語の áu

---

Braune/Reiffenstein (2004) S.307 を参照のこと。

<sup>2</sup> Meid (1971) S82ff., Bammesberger (1986) S.144 を参照のこと。

<sup>3</sup> Mottausch (1998) は、\*būan の現在形は-j-現在形ではなかったとしている (S.67)。Meid (1971) も、\*sējan 等と異なり、\*būan という-j-の無い形をあげている (S.67)。それに対し、Ringe (2006) は、インド・ヨーロッパ祖語の形として \*bhuh<sub>2</sub>-ye/o- という形をあげている (S.79, S.101, S.134)。

<sup>4</sup> Ringe (2006) も、ゲルマン祖語の現在語幹をあげる時には、\*būi- ~ \*būa (S.134)、不定詞をあげる時には \*būana (S.79, S.101, S.235, S.251) という-j-の無い形を用いている。

<sup>5</sup> Braune/Heidermanns (2004) S.46 を参照のこと。

<sup>6</sup> Seebold (1970) の BÖWW-A-の項 (S.124ff.) を参照のこと。

<sup>7</sup> たとえば de Vries (1977) の búa の項、Pfeifer u.a. (1989) の bauen の項、Duden Bd. 7 の bauen の項を参照のこと。

<sup>8</sup> Lloyd u.a. (1998) S.412f. を参照のこと。

の音価をどう考えるかという問題にある。すなわち、ゴート語の *áu* については、単純長母音 [ɔ:] とする説と二重母音 [au] とする説があるが<sup>9</sup>、後者の説に立った場合に、二重母音を導き出すために、\**bōwwan* や \**bōūan* や \**bōwan* という祖形が必要になって来るのである。

Seebold (1970) は、\**bōwwan* という祖形からすべてのゲルマン語の形の説明を試みているが、ゴート語 *bauan* については \**ōww* > \**ōw* > *au* という変化を、幹母音として *ū* を持つ語形については \**ōww* > \**ūw* > *ū* という変化を想定している。二重の *w* が仮定されているが、これは各ゲルマン語の関連形態を説明するのに必要なためにそうされているのにすぎず、なぜ *w* が二重化しているのかについては全く説明が試みられていない。また、\**ōww* という非常に奇妙な音連続がはたして可能であったのか、甚だ疑問である。

ゴート語の *áu* (および *ái*) については、かつては二重母音とする説が有力であったが、現在では、長母音とする説の方が有力であり、本稿でもその説に従っている。*áu* を長母音とする最大の根拠は、ギリシア語の *αυ* が *au* ではなく *aw* で表されているということであるが<sup>10</sup>、もう一つ非常に重要な根拠がある。それは、インド・ヨーロッパ祖語の *VūV* という音連続の発展の仕方の問題である。そしてそれにはまさに、*bauan* という形態自体が関わってきている。インド・ヨーロッパ祖語の *VūV* はゲルマン祖語では *V-wa* あるいは *Vū-wa* となる。*Vū-wa* はゴート語と古ノルド語では更にそれぞれ *VggvV*、*VggvV* となる。従って、ゲルマン語では *Vū-V* という分節は不可能なはずである。しかしながら、ゴート語の *áu* を二重母音と仮定すると、*bauan*、*bnauan*、*trauan*、*stauida*、*staua*、*taui* において、不可能なはずな分節が生じてしまうことになる。Krahe/Seebold (1967) は、ゲルマン祖語の *-ōw-* は、ゴート語では母音の前で *áu*、*j* の前で *o* になったとし、ゲルマン祖語の *au* とは分けて考えなければならないとしている (S.66)<sup>11</sup>。しかしながら、この説では、\**bōwan* を *bō-wan* ではなく *bōū-an* と分節しなければならない上、長二重母音の短二重母音化の時期をかなり遅くに設定せざるをえなくなり、これは考えにくい。

\**bōwwan* や \**bōūan* や \**bō(w)an* といった祖形が設定されるのには、北ゲルマン語に見られる幹母音が *ō* の語形の存在もある。

古アイスランド語及び古ノルウェー語には *búa* の現在分詞に由来する名詞 *búande* に *bónde* や *bóande* という別形があり、またまれにしか見られないが、古ノルウェー語では *búa* 自体にも *bóa* という別形がある。Noreen (<sup>1970</sup>) は、これらの語における *ó* を *öu*

<sup>9</sup> 単純長母音説については、とりわけ Braune/Herdermanns (2004) S.43ff を、二重母音説については、とりわけ Krause (1968) S.68f を参照のこと。

<sup>10</sup> Braune/Heidermanns (2004) S.44f を参照のこと。

<sup>11</sup> Krause (1968) も同一見解である (S.83)。

に由来するとしている(S.144)。また、*bónde* については、*bóande* と第2音節がアプラウトの関係にある *\*bóunde* の縮約形であるとし(S.115, S.365)、このアプラウトを実証するものとして古スウェーデン語ルーン碑文に見られる対格形 *bounta* をあげている(S.115)<sup>12</sup>。Lloyd (1998)も母音の違いをアプラウトによるものとしているが、Noreen と異なり、*ū:ō* というアプラウトを仮定している。Seebold (1970)はまた別の説を唱えているが、これについては下記を参照されたい。

これらの説はどれも決定的なものではないが、いずれにせよ *bónde* 等の *ó* が *ú* から何らかの原因で変化したものではなく、本来的なものである可能性は否定できないであろう。

この *ó* はまた、現在分詞由来の名詞に集中しており、動詞の方には古アイスランド語では全く、古ノルウェー語でもまれにしか見られないという特異な分布を示している。この特異な分布は、この *ó* の起源とつながりがあるのかもしれない。しかしながら、この *ó* の起源もその特異な分布の理由も、今のところ不明とせざるを得ない。

ゲルマン祖語の語幹末の *ū* は、東ノルド語で *ō* になる<sup>13</sup>。よって *\*būan* は、例えば古スウェーデン語では、*bōa* である。*\*būan* 以外にこの変化を示す例を、西ゲルマン語及び古アイスランド語と古スウェーデン語を対比させる形であげると、次のようになる。

古ア *búc* — 古ス (land-) *bōe*

古ア *brú* — 古ス *brō*

古ア *brúa* — 古ス *brōa*

古高ド *nūen*、古ア *gnúa* — 古ス *gnōa*

古ア *snúa* — 古ス *snōa*

古英 *sū*、古ザ *sū*、古高ド *sū*、古ア *sýr* (<*\*sūr*) — 古ス *sō*

古英 *trūwa*、中低ド *trūwe*、古高ド *trūa*、古ア *trú* — 古ス *tō*

古英 *trūwian*、古ザ *trūōn*、古高ド *trūēn*、古ア *trúa* — 古ス *tōa*

(古ス=古スウェーデン語、中低ド=中低ドイツ語)

現代北ゲルマン語では、次のような対立になっている (*\*būan* については、冒頭であげているので省略する)。

<sup>12</sup> 併せて Noreen (1904) S.332 も参照のこと。

<sup>13</sup> この *ō* は、まずある特定の音環境で生じた後、平均化により *ū* を駆逐していったものと考えられるが、*ō* が最初に生じた音環境についてははっきりしておらず、Noreen (1904)が *a* の直前としているのに対し(S.113)、Ranke/Hofmann (1979)は語末と母音連続においてとしている(S.74, S.77)。

ア brú、フェ brúgv、ノ bro, bru、ス bro、デ bro  
 ア gnúa、ノ gnu、ス gno、デ gnu  
 ア snúa、フェ snúgva、ノ sno, snu、ス sno、デ sno  
 ア sýr、フェ súgv、ノ so, su、デ so  
 ア trú、フェ trúgv、ノ tro, tru、ス tro、デ tro  
 ア trúa、フェ trúgva、ノ tro, tru、ス tro、デ tro

ノルウェー語では、gnu 以外の語において、o を持つ語形と u を持つ語形が併存しているが、前者は bokmål の形で、後者は nynorsk の形である。唯一 o を持つ別形を持たない gnu は、デンマーク語でも gnu である<sup>14</sup>。これらのことから、ノルウェー語の o を持つ語形は、デンマーク語から入ったものと考えられる<sup>15</sup>。

上掲の語の他、「牝牛」を表わす語も西ノルド語で ū、東ノルド語で ö を示している。西ゲルマン語、古アイスランド語、古スウェーデン語の語形は、次の通りである（ゴート語には対応語が残されていない）。

古英 cū、古フ kū、古ザ kō、古高ド kuo、古ア kýr (<\*kūr)、古ス kō

現代北ゲルマン語では、次の通りである。

ア kýr、フェ kúgv、ノ ko, ku、ス ko、デ ko

ノルウェー語の ko は bokmål の形、ku は nynorsk の形であり、前者はデンマーク語から入ったものと考えられる。

これらの語は、明らかにインド・ヨーロッパ祖語の\*g<sup>h</sup>ōūs に由来しており、古ザクセン語と古高ドイツ語ではそれぞれ ö 及びそこから変化した uo が確認できる。古英語と古フリジア語では ū が現れているが、これは語末で ö が変化したもので、この音変化は次の語においても見ることができる<sup>16</sup>。

<sup>14</sup> デンマーク語の gnu は、de Vries (1977) の gnúa の項であげられているのみで、他ではその存在が確認できなかった。もしこの語形で存在しているのだとしたら、東ノルド語で起こった ū > ö という音変化の例外ということになる。

<sup>15</sup> \*būan は、ノルウェー語の方言においては、bo と bu が混在した状態を示している。方言的な bo の一部はデンマーク語から入ったものではなく、古ノルウェー語の bóa に由来するものと考えられる。

<sup>16</sup> 古ザクセン語にも、hwō の別形に hū がある。この ū > ö という音変化は、本来 ū の後でのみ起こったものである可能性があるが、この点については、はっきりしていない。Campbell (2003) S.47f.を参照のこと。

古英 bū (< \*bō), hū (< \*hwō), tū (< \*twō)

古フ hū (hwō と並んで)

西ノルド語の ū については、類例が無いために確実なことは言えないが、おそらく ō が前後を ū にはさまれたことによる特殊な変化であろう<sup>17</sup>。

東ノルド語の ō については二通りの可能性が考えられる。一つは、西ノルド語だけでなく、北ゲルマン語全体で ō が ū になり、その後、東ノルド語で \*būan 等の場合と同様に ū > ō という音変化が起こったという可能性である。もう一つは、東ノルド語では、インド・ヨーロッパ祖語の ō が, ū になることなくそのまま引き継がれたという可能性である。どちらとも判定は困難であるが<sup>18</sup>、たとえ後者であったとしても、古ザクセン語及び古高ドイツ語が異なった母音の対応を示していることから、\*būan 等とは区別して扱う必要がある。

西ノルド語の ū に対して東ノルド語で ō が対応している場合、西ノルド語の ū は kūr (< \*kūr) を除きすべて本来のもので、東ノルド語の方でのみ変化が起きているという考えに対し、Seip (1954) は異論を唱えており、būa / bōa 及び snūa / snōa については、ō を持つ形の方が古いと主張している。Seip はまず、西ノルド語の一部の語において ō > ū, v という音変化が起こっているということを示し述べている。その上で、būa / bōa については、ノルウェー語の方言や古い資料にノルウェー語本来のものと考えられる ō が見られること (上記参照)、snūa / snōa については、ノルウェー語の形容詞 snodig が ō を持つことから、būa, snūa よりも bōa, snōa の方が古いと結論している。

西ノルド語に見られる ō > ū の例としてあげられているのが、skór の変化形の skúar<sup>19</sup> と人名の Grōa の別形 Grua, Grue<sup>20</sup> である。Grōa, Grua, Grue は、動詞の gróa から派生したものと考えられる<sup>21</sup>。skór も gróa も、ゴート語や西ゲルマン語の対応語がすべて ō を示しており、よって ō が本来の母音であり、西ノルド語で ō > ū という変化が起こっているのは明白である。

<sup>17</sup> Ringe (2006) は、一つの可能性として、\*g<sup>w</sup>ow- > \*g<sup>w</sup>uw- > \*gū- > \*kū- という変化を想定している (S.198)。

<sup>18</sup> Ranke u. Hofmann (<sup>4</sup>1979) S.74 及び Noreen (1904) S.113 では、kō についても ū が ō に変化したとされている。

<sup>19</sup> skór は古くは次のような語形変化をした。ō > ū は a の前で起きた変化である。

単数主格 skór、単数属格 skós、単数与格 skó、単数対格 skó、複数主格 skúar、  
複数属格 skúa、複数与格 skóm、複数対格 skúa

<sup>20</sup> Grua は 14 世紀のノルウェー語の文献に見られる形、Grue は現代ノルウェー語の方言に見られる形である。

<sup>21</sup> de Vries (1977) の gróa の項を参照のこと。

古ア skór — 古 skohs、古英 scōh、古フ skōch、古ザ skōh、古高ド scouch  
古ア gróa — 古英 grōwan、古フ grōwa, grōia、中低ド grōien、古高ド gruoan

それに対し、\*būan の西ゲルマン語における幹母音は ū である。もし bōa の方が本来の形態で būa が二次的な形態なのだとしたら、西ゲルマン語の ū が問題になって来るが、Seip はこの点に全く触れていない。西ゲルマン語の ū からすると、bōa の方が būa よりも古いという説は、甚だ疑わしい。būa の ū を skúar や Grua の ū と同様の音変化により生じた二次的なものであるという説明には無理があると言わざるを得ない。snúa<sup>22</sup>は、北ゲルマン語以外の対応語がゴート語 sniwan、古英語 snēowan と、共に正常階梯を示しており、幹母音が ō や ū のものは存在していないが、おそらく būa と同様に ū を持つ snúa が本来の形態であろう。形容詞の snodig の ō は、sno の影響によるものと思われる<sup>23</sup>。

Seebold (1970)も、少なくとも būa と trúa は互に対応し合う祖形を持つはずだとし、Seip の説を批判している。その上で、北ゲルマン語 (及び北海ゲルマン語)<sup>24</sup> では、ōww は二通りの変化をし、一方で ōww > ūw > ū となつたのに対し、もう一方では ōww > ōw > ō となつたと仮定している。そして bōa, gnōa, snōa, trōa の ō は、後者の変化によるとしている。しかしながら、東ノルド語の諸形に限定するならば、語幹末の ū > ō という音変化により説明が可能である。

インド・ヨーロッパ祖語の動詞の語幹形成法という観点からすると、インド・ヨーロッパ祖語に再建しうる\*bhūeh<sub>2</sub>の現在語幹として Rix (1998) (以下 LIV とする) であげられているのは、\*bhéuh<sub>2</sub>-e<sup>25</sup>と\*bhuh<sub>2</sub>-ié<sup>26</sup>である。\*būan が元々-j-現在形を持っていたとすると、\*bhuh<sub>2</sub>-iéにつながることになる。

\*bōuan という祖形を仮定した場合も、インド・ヨーロッパ祖語の動詞語幹と結び付けて考えることは可能で、ō 階梯を用いた反復動詞語幹の\*bhōúh<sub>2</sub>-ie-の発展形と説明することができる。ō 階梯を用いた反復動詞は、o 階梯を用いたものに比べ数は少ないものの、ゲルマン語でも古アイスランド語 hólá、古英語 hēlan、古高ドイツ語 houlen をその例としてあげることができる。また、ō 階梯の反復動詞に由来する可能性が考えられる動詞として更にゴート語 afdjoan 及び古英語 fēgan、古フリジア語 fōgia、古ザ

<sup>22</sup> snúa は、インド・ヨーロッパ語の語根\*sneūH-より形成されている。

<sup>23</sup> デンマーク語には snodig という語は無いので、直接的な借用は考えられない。

<sup>24</sup> 北海ゲルマン語の問題については、後述する。

<sup>25</sup> \*bhéuh<sub>2</sub>-e-に由来するものとして、ヴェーダ語の bhávati や古アイスランド語の byggva をあげることができる。

<sup>26</sup> \*bhuh<sub>2</sub>-ié-に由来するものには、例えばラテン語の fiō がある。

クセン語 *fōgian*、古高ドイツ語 *fuogen* を加えることができる (LIV による)<sup>27</sup>。

Lloyd u.a. (1998)は、\**bōan* / \**būan* という祖形を設定しているが、これらを強意動詞 \**bhébhuoh<sub>2</sub>*- / \**bhébhuh<sub>2</sub>*-<sup>28</sup>に由来するとし、語根重複音節の脱落とテーマ母音の付加により両形態ができたとしている。\**būan* の現在形が *-j-* 現在形でなかったとしたら、この弱語幹の方とうまく結びつくことになる。しかしながら、ゲルマン語においては、強意動詞に由来することが確実と言える動詞は一つもなく、唯一ゴート語 *reiran* (*reiran* < \**réiroi-*、語根 *rei-*より) にその可能性があるとされているのみである (LIV による)。また、ゴート語 *reiran* の場合、語根重複音節が語幹に発達したとされており、\**būan* の場合とは仮定される変化が異なっている。

\**bōan* / \**būan* という祖形を設定するのであれば、別の可能性も考えられよう。母音が *e* の語根重複音節を持ちテーマ母音を伴わない現在語幹も、強語幹で *o* 階梯、弱語幹で消失階梯が用いられるので、\**bōan* / \**būan* という形を引き出すことができる (\**bhébhuoh<sub>2</sub>*- / \**bhébhuh<sub>2</sub>*-)。LIV によると、強変化動詞第7種の内、\*-*aiK-*、\*-*auK-*、\*-*alK-*、\*-*anK-* (K は子音) という語幹形態のもの多くがこのタイプの語幹にさかのぼるか、あるいはその可能性があるとされるが<sup>29</sup>、もしそうだとするならば、このタイプの語幹から \**bōan* / \**būan* を引き出した方が説得力があるように思われる (下記参照)。ただ難点は、ゲルマン語では、このタイプの語幹に由来する動詞は、強語幹から形成されているものしか見られず、弱語幹から形成されている、あるいはその可能性のあるものが全く見られないことである。

次に、\**būan* の各言語における変化形について見ていくことにする。

ゴート語 *bauan* は、直説法3人称単数形の *bauip* から明らかのように、現在形及び不定詞は強変化である。過去形は、直説法3人称単数形の *bauida* が1例あるのみであるが、弱変化第3種の形を示している。また *bauan* から派生した *i* 語幹女性名詞 *bauains* も、弱変化第3種に対する形成法である。

古アイスランド語 *búa* は、完全に強変化である。

---

<sup>27</sup> インド・ヨーロッパ祖語において、反復動詞と使役動詞は形成法が完全に同一であるが、*ō* 階梯を用いた使役動詞に由来するゲルマン語の動詞としては、古アイスランド語 *ósa*、古アイスランド語 *sófa* をあげることができ、更に古アイスランド語 *fōgia* にもその可能性がある (LIV による)。

<sup>28</sup> Lloyd u.a. (1998) S.412 f.を参照のこと。この強意動詞の語根重複音節は、ここであげているのとは異なった形を仮定すべきかもしれないが、ここではLloydらの説に従っている。

<sup>29</sup> LIVにおいては、強変化動詞第7種の内、\**gangan*、\**haitan*、\**hanhan*、\**hauan*、\**hlaupan*、\**laikan*、\**wallan* がこのタイプの語幹にさかのぼるとされ、また \**bautan*、\**blandan*、\**skaiþan*/\**skaidan*、\**spaltan*、\**spannan*、\**staldan*、\**stautan*、\**walkan* にもその可能性があるとされる



búa — bjó — bjuggum, bjoggum — búenn

現代北ゲルマン語では、今なお強変化のアイスランド語を除き、弱変化に移行している。

フェ búgva — búði — búð  
ノ bo — bodde — bodd, bu — budde — budd  
ス bo — bodde — bodd  
デ bo — boede — boet

古英語 *būan* の不定詞および現在形は強変化である。過去形は *būde* または *būede* という特殊な弱変化形である。過去分詞は *gebūn*, *gebūen*, *būn* で強変化である。

古ザクセン語では、不定詞の *būan* は強変化の形である<sup>30</sup>。過去形は、直説法3人称単数形の *būide* が1例あるのみであるが、弱変化第1種の形を示している。古ザクセン語に *būan* の過去分詞は残されていないが、中低ドイツ語では *(ge)bū(w)et* で、弱変化である。

古フリジア語の不定詞 *būwa* は、ウムラウトを示しておらず、また語尾が *-a* であるので、強変化形と考えられる。現在形も同様である。過去形は *būvde* で、弱変化第1種である。過去分詞の用例は残されていない。

古高ドイツ語 *būan* の不定詞及び現在形は、強変化である。過去形は *būta* で、弱変化第1種である。これと並んで古高ドイツ語には、直説法過去3人称複数形に *biruun*、接続法過去2人称単数形に *biruuuis* という形が残されている。詳細な成立過程は不明であるが、これらが語根重複過去形に由来することは確かである。古高ドイツ語には過去分詞の用例は無いが、中高ドイツ語では *gebūwet* という弱変化形と並んで *gebūwen* という強変化形が存在している。

なお、現代西ゲルマン語では、オランダ語の *bouwen* も西フリジア語の *bouwe* も低地ドイツ語の *buen*, *boen*, *bugen* もドイツ語の *bauen* もすべて弱変化である。

このように、\**būan* の語形変化系列内には、強変化形と弱変化形が混在している。これはおそらくは、元々強変化だったものが弱変化へ移行していったためであろう。この移行は、弱変化過去形の形が言語により異なり、また古アイスランド語では完全に強変化であることから、個別言語的なものと考えられるが、アプラウトによる強変化過去形が古アイスランド語にしか見られないことから、個別言語的に語根重複による過去形からアプラウトによる過去形が形成される以前に起こったものと推定できる。

<sup>30</sup> 古ザクセン語 *būan* の現在形は、例が残されていない。

\*būan には、冒頭であげた形の他、古英語と古高ドイツ語では別形が存在している。

古英 būgan, būian, būwian, būgian, bȳa

古高ド būwan, būen, būwen

古英語では、būian, būwian, būgian といった弱変化第 2 種の形態と bȳa という弱変化第 1 種の形態が、また古高ドイツ語では būen, būwen という弱変化第 1 種の形態が形成されている。古英語の bȳa はノーサンブリア方言の形である。古高ドイツ語の būen, būwen は、おそらく過去形 būta からの逆成であろう。

これらの別形の中には、古フリジア語 būwa と同様、語幹末に w を持つものが存在しており、古英語では更に g を持つものも見られる。古高ドイツ語では、w の無い形の方が多数を占めているが、中高ドイツ語では、w を持った形が一般化する。低地ドイツ語でも、古ザクセン語 būan は、常に w を伴わない形で現れているが、中低ドイツ語では w を伴った buwen が普通である。中期オランダ語の buwen も w を伴っている。

w は、古英語 trūwian のように、\*trū-にも見られ、古高ドイツ語 trūēn にも trūwēn という別形がある。中期オランダ語 truwen も w を伴っている。

この w は、ū と後続母音との間に生じた渡り音と考えられる<sup>31</sup>。

古英語の būgan と būgian は語幹末に g を伴っている。語幹末に加えられる g の問題については、2 つ、併せて考えていかなければならない動詞がある。

一つは古英語 bōgian、古フリジア語 bōgia である。\*būan との語源的関連性は明らか

---

<sup>31</sup> 語源的に理由づけられない語幹末の w は、西ゲルマン語の ē, ō を幹母音として持つ強変化動詞第 7 種の *verba pura* においても見られる。

古英 blāwan, cnāwan, crāwan, māwan, rāwan (?), sāwan, wāwan, þrāwan, blōwan,  
flōwan, grōwan, hlōwan, rōwan, snōwan (?), spōwan

古ザ sāian-sāida, sēu

古高ド krā(w)an, sāl(w)an, blou(w)an

古英語では、すべての動詞のすべての変化形が常に w を伴い、w が完全に一般化・固定化している。古ザクセン語では、sāian の過去 3 人称単数形に、sāida と並んで、一例のみだが (obar-) sēu という形が出てくる。古高ドイツ語では、w を伴った形は、ほぼ東フランケン方言に限定されている。

これらの動詞における w は、\*būan の場合と異なり、過去複数形において生じ (eo-u- > eo-wu-)、他の形態に広がったものと考えられる。この w の起源については、筆者が 2011 年の日本独文学会秋季研究発表会において、口頭発表「西ゲルマン語の *verba pura* における語幹末の w の起源について」を行っている。

と考えられるが、やはり語幹末に *g* を持っている。古英語 *bōgian* は古英語 *būgan* と同義である。古フリジア語 *bōgia* は、古フリジア語 *būwa* が他動詞で、*„bauen, errichten“*、*„(Land) bebauen, bearbeiten“*、*„bewohnen, sich aufhalten in“* という意味なのに対し、自動詞で、*„wohnen, sich aufhalten“* という意味で、違いが見られる。

もう一つの動詞は、古英語 *trūwian* の別形 *trūgian* である。これもやはり、語幹末に *g* を示している。

古英語 *būan* の別形に見られる *g*、古英語 *bōgian*、古フリジア語 *bōgia* に見られる *g*、古英語 *trūgian* の *g* は、それらすべてがではなく一部だけかもしれないが、同一起源あるいは少なくとも起源的に何らかの関係を持っているのは確かであろう<sup>32</sup>。

低地ドイツ語 *bugen* においても、語幹末に *g* が見られるが、この *g* は長母音の後で *w* が変化したものである<sup>33</sup>。フェーロー語 *búgva* でも *gv* が現れているが、これはフェーロー語で *skerping* と呼ばれる音変化によるもので、規則的な音変化であり、*snúgva*、*trúgva*、*kúgv* 等においても見ることができる。これは、*ō*、*ū* の直後に母音が続くとして渡り音として *w* が生じ、その後、先行母音が「短母音 + *w*」と再解釈されることにより二重の *w* (*ww*) を生じ、それが *gv* になるという変化である<sup>34</sup>。

古英語 *būgan* 等の *g* も、低地ドイツ語やフェーロー語の場合のように、渡り音の *w* から発達したものである可能性はあるかと思われるが、今のところその起源は不明とせざるを得ない。

古英語 *bōgian*、古フリジア語 *bōgia* については、*g* だけでなく、幹母音の *ō* も問題である。この *ō* も、西ノルド語の *bónde* 等の *ó* と同様、*ōww* にさかのぼるといふ説、*ōu* にさかのぼるといふ説、*ō* にさかのぼるといふ説がある。西ノルド語の *bónde* 等では、*ō* が現在分詞由来の名詞に集中して現れているという特異な分布が見られたが、古英語 *bōgian*、古フリジア語 *bōgia* ではそのようなことはない。その代り、古英語 *bōgian*、古フリジア語 *bōgia* では、両者が弱変化第2種であるということと、*g* の存在が特徴的である。両語の *ō* の起源とこれらのことの間に関連があるのかもしれないが、不明である。*\*būan* をめぐる他の音韻・形態論上の不明点と同様、今後の研究課題に加えた

---

<sup>32</sup> Flasdieck (1935)は、古英語 *būgan*、*būgian* の *g*、*gi* は *i̇* であるのに対し、古英語 *bōgian* の *g* は接尾辞 *q* (= *k*) に由来し、*bōgian* は名詞派生動詞であるとしており (S.93)、また *trūgian* についても同様の接尾辞の添加を仮定している (S.53)。Seebold (1970)は、古英語 *būgian* と古英語 *bōgian* は同一の語であるとし、Flasdieck のこの説を否定している (S.127)。

Flasdieck の説は、元となるはずの名詞がどの言語にも存在しておらず、やはり説得力に欠けていると言わざるを得ない。しかしながら、Seebold の古英語 *būgian* と古英語 *bōgian* が同一の語であるとする主張も、容易に受け入れることはできない。

<sup>33</sup> Lasch (1974) S.185 を参照のこと。

<sup>34</sup> Árnason (2013 [2011]) S.31f. を参照のこと。

参考文献  
(現代語辞典は省略)

- Árnason, Kristján 2013 [2011]: The phonology of Icelandic and Faroese, reprinted 2013, Oxford University Press.
- Bammesberger, Alfred 1986: Der Aufbau des germanischen Verbalsystems, Heidelberg.
- Beekes, Robert Stephen Paul 1995: Comparative Indo-European linguistics, an introduction, translated by Paul Gabor, Amsterdam/Philadelphia.
- Bosworth, Joseph and T. Northcote Toller <sup>11</sup>1991: An Anglo-Saxon dictionary, Oxford University Press.
- Boutkan, Dirk u. Sjoerd Michiel Siebinga 2005: Old Frisian etymological dictionary, Leiden.
- Braune, Wilhelm <sup>15</sup>2004: Althochdeutsche Grammatik 1, Laut- und Formenlehre, bearb. von Ingo Reiffenstein, Tübingen.
- <sup>20</sup>2004: Gotische Grammatik, neu bearbeitet von Frank Heidermanns, Tübingen.
- Bremmer Jr., Rolf H. 2009: An introduction to Old Frisian, Amterdam/Philadelphia.
- Brunner, Karl <sup>3</sup>1965: Altenglische Grammatik, Tübingen.
- Campbell, Alistair 2003 [<sup>3</sup>1968]: Old English grammar, Oxford.
- Cleasby, Richard and Gudbrand Vigfusson 1993 [<sup>2</sup>1957]: An Icelandic-English dictionary, second edition with a supplement by William A. Craigie, Oxford.
- Cordes, Gerhard 1973: Altniederdeutsches Elementarbuch, mit einem Kapitel „Syntaktisches“ von Ferdinand Holthausen, Heidelberg.
- Duden Bd. 7., Das Herkunftswörterbuch, 5. neu bearbeitete Auflage, 2013 Berlin/Mannheim/Zürich.
- Feist, Sigmund <sup>3</sup>1939: Vergleichendes Wörterbuch der gotischen Sprache, mit Einschluß des Krimgotischen und sonstiger zerstreuter Überreste des Gotischen, Leiden.
- Flasdieck, H.M. 1935: Untersuchungen über die germanischen schwachen Verben III. Klasse (unter besonderer Berücksichtigung des Altenglischen), in: Anglia, Zeitschrift für englischen Philologie 59, S.1-192, Halle.
- Gallée, Johan Hendrik <sup>3</sup>1993: Altsächsische Grammatik, Tübingen.
- Grosse, Rudolf (Hrg.) 2007: Althochdeutsches Wörterbuch, Reprint der Bände I-IV, Berlin.
- Gutenbrunner, Siegfried 1951: Historische Laut- und Formenlehre des Altisländischen, Heidelberg.
- Heusler, Andreas <sup>7</sup>1967: Altisländisches Elementarbuch, Heidelberg.

- Hirt, Hermann 1931/1932: Handbuch des Urgermanischen, 1. und 2. Teil, Heidelberg.
- Hofmann, Dietrich u. Anne Tjerk Popkema 2008: Altfriesisches Handwörterbuch, unter Mitwirkung von Gisela Hofmann, Heidelberg.
- Holthausen, Ferdinand <sup>3</sup>1974: Altenglisches etymologisches Wörterbuch, Heidelberg.
- Holthausen, Ferdinand u. Dietrich Hofmann 1985: Altfriesisches Wörterbuch, zweite, verbesserte Auflage, Heidelberg.
- Kluge, Friedrich <sup>24</sup>2002: Etymologisches Wörterbuch der deutschen Sprache, bearbeitet von Elmar Seebold, Berlin/New York.
- Köbler, Gerhard 1989: Gotisches Wörterbuch, Leiden.
- 1993: Wörterbuch des althochdeutschen Sprachschatzes, Paderborn.
- Krahe, Hans <sup>2</sup>1967: Historische Laut- und Formenlehre des Gotischen, bearbeitet von Elmar Seebold, Heidelberg.
- <sup>7</sup>1969: Germanische Sprachwissenschaft I, bearb. von Wolfgang Meid, Berlin.
  - <sup>7</sup>1969: Germanische Sprachwissenschaft II, bearb. von Wolfgang Meid, Berlin.
- Krause, Wolfgang <sup>3</sup>1968: Handbuch des Gotischen, München.
- Lasch, Agathe 1974: Mittelniederdeutsche Grammatik, 2., unveränderte Auflage, Tübingen.
- Lehmann, Winfred P. 1980 [1952]: Proto-Indo-European phonology, Austin.
- 1986: A Gothic etymological dictionary, Leiden.
- Lloyd, Albert L. u.a. 1998: Etymologisches Wörterbuch des Althochdeutschen, Band II, Göttingen.
- Lübben, A. 1970 [1882]: Mittelniederdeutsche Grammatik, nebst Chrestomathie und Glossar, Nachdruck der Ausgabe 1882, Osnabrück.
- Meid, Wolfgang 1971: Das germanische Präteritum, Innsbruck.
- Meier-Brügger, Michael 2000: Indogermanische Sprachwissenschaft, 7., völlig Neubearbeitete Auflage der früheren Darstellung von Hans Krahe, Berlin/New York.
- Mitchell, Bruce u. Fred C. Robinson 2001: A guide to Old English, sixth edition, Blackwell Publishing.
- Mottausch, Karl-Heinz 1998: Die reduplizierenden Verben im Nord- und Westgermanischen: Versuch eines Raum-Zeitmodells, in: NOWELE 33, S. 43-91, John Benjamins Publishing Company.
- Mossé, Fernand 1969 [<sup>2</sup>1956]: Manuel de la langue Gotique, Paris.
- Noreen, Adolf 1904: Altnordische Grammatik II, Altschwedische Grammatik, mit Einschluß des Altgutnischen, Halle.
- <sup>5</sup>1970: Altnordische Grammatik I, Tübingen.
- Paul, Hermann <sup>23</sup>1989: Mittelhochdeutsche Grammatik, Neubearbeitet von Peter Wiehl und Siegfried Grosse, Tübingen.

- Pfeifer, Wolfgang u.a. 1989: Etymologisches Wörterbuch des Deutschen, Berlin.
- Pokorny, Julius 1959/1969: Indogermanisches etymologisches Wörterbuch, 2 Bde., Berlin, München.
- Polomé, Edgar C. 1988: Are there traces of laryngeals in Germanic? in: Bammesberger, Alfred (Hg.): Die Laryngalthorie, S. 383-414, Heidelberg.
- Prokosch, Eduard 1939: A comparative Germanic grammar, Linguistic society of America.
- Ranke, Friedrich u. Dietrich Hofmann<sup>4</sup>1979: Altnordisches Elementarbuch, Berlin/New York.
- Ringe, Don 2006: From Proto-Indo-European to Proto-Germanic (A Linguistic History of English, Volume I), Oxford University Press.
- Rix, Helmut 1998: Lexikon der indogermanischen Verben, die Wurzeln und ihre Primärstambildungen, bearbeitet von Martin Kümmel, Thomas Zehnder, Reiner Lipp, Brigitte Schirmer, Wiesbaden.
- Schützeichel, Rudolf 2006: Althochdeutsches Wörterbuch, 6., Auflage, überarbeitet und um die Glossen erweitert, Tübingen.
- Seebold, Elmar 1970: Vergleichendes und etymologisches Wörterbuch der germanischen starken Verben, The Hague.
- Sehr, Edward H. 1966: Vollständiges Wörterbuch zum Heliand und zur altsächsischen Genesis, 2. durchgesehene Auflage, Göttingen.
- Seip, Didrik Arup 1954: Skiftet bū : bō i nordiske språk, in: Annales Academiae Scientiarum Fennicae, Ser. B 84, Helsinki.
- Sjölin, Bo 1969: Einführung in das Friesische, Stuttgart.
- Splett, Jochen 1993: Althochdeutsches Wörterbuch, 2 Bde., Berlin/New York.
- Streitberg, Wilhelm<sup>4</sup>1974: Urgermanische Grammatik, Heidelberg.
- 2000: Die gotische Bibel, Band 2, Gotisch-Griechisch-Deutsches Wörterbuch, 6. Auflage, Heidelberg.
- Szemerényi, Oswald 1990: Einführung in die vergleichende Sprachwissenschaft, 4., durchgesehene Auflage, Darmstadt.
- de Tollaenere, Felicien and Randall L. Jones 1976: Word-indices and word-lists to the Gothic bible and minor fragments, Leiden.
- de Vries, Jan 1977: Altnordisches etymologisches Wörterbuch, Leiden.
- 1987: Nederlands etymologisch woordenboek. Leiden.
- Wright, Joseph 1981 [1910]: Grammar of the Gothic language, second edition with a supplement to the grammar by O. L. Sayce, Oxford University Press.
- Wright, Joseph and Elizabeth Mary Wright 1984 [1925]: Old English grammar, third edition, Oxford University Press.